笠川隼之助所蔵

宸翰等之寫

4395

414
A 4696

宮内省圖書寮

後醍醐天皇宸翰之寫

大正十一年四月
大澤侯爵邸寄贈

聯惟日吉山王神德高比須彌山神恩
深比蒼海屢蒙靈驗今將亢龍有悔無
爲如何近曾雖有參籠志未果宿願之
間卒企登山冀七社神靈無憐者也若
達心願之旨趣永令復太古祭祀益可耀
神威盡未來際所希衛護正祚長久依
祈願之狀無佗者也

嘉曆三年三月七日　　御花押

宮内省圖書寮

後鳥羽院天皇宸翰之寫

夫近江國滋賀郡山王日吉廿一社王城守護之神也朕久去鳳闕在僻地嗟呼悲哉神將何忌矣故事廢絶萬機茫々可憐春朝黄鳥夏月杜鵑冬嶺積雪各有其態朕獨何如斯矣竊思之艮岳靈神之崇歟故爲慰神慮自作劔一振進於寶前兼日有所念雖隔千里波濤無神憐故竊備之者也

建久七年四月申日

御花押

後醍醐天皇宸翰之寫

朕ひさしく賊臣のためにうちくるしめに苦し
められ給ふことに忠臣笠川盛のしまの家に
竊に居り給ふ事五十餘日及ひもあまる
にまゐり給ふに此に語不圖夢に吉の字
の三ははなる帰こことに祈誓すへし
と我うんてまりける給ふ夜にせん第一に
日よし此社夫より住吉の社并く笠川
盛の弟なる給ふものを密使に巻し誓書
抜奉まいるかくて今一の吉の付る

滋賀縣

うこと を 表 す る 吉備は 代 神 霊 験 な
き と 世 て に 経 の 名 盛 の 弟 の 一 子 豊 保 よ
命 し 其 社 に ち し 学 そ る る 朕 の 志 願 の
ま ま 成 し く た う ひ て 吉 備 は 四 郎
と 拙 宣 し 孫 の 宮 く う し 穴 賢 し
建武二年

御花押

備前國

吉備津社

社務中

後村上天皇宸翰之写

父 王 足 利 う 乱 成 避 皇 居 を 山 門 よ
始 し 孫 く 王 義 貞 正 成 い 更 な り 衆
徒 法 師 な ん と も 心 成 一 致 よ し 京
中 護 し 京 し の 方 う 中 ほ と 梨 ま る
日 枝 山 築 地 て 京 よ 笠 川 来 と い く る
も の 城 長 と し て 九 家 志 々 士 河 中 て
と 為 て 心 を 尽 し た る 者 と 不 日 中
な る 者 い 家 城 を は ら し て 遥 送 せ し
う て 義 貞 正 成 も 中 忠 神 を 感 し

一とゝて敵味方に達せさせ給ふ事
きこえにより父母も深く感ずめ
給ふ心を感を賞し給ひ
昇殿をゆるさせ給へり
父母毎〻朕をゆゑなき孫ひて孝行
ひろく大孫こゝ朝恩を忘れ
孫に天下を授め給ひ其君をさゝく
諫せんと思ふる事道の者さく行ふ
引うて九家の違う心我忘れぬる
事のやさしさ思ひ回れ

さゝくあ梨あそう孝うともう我一
義のそのゝと梨立ばさせもせ
て　龍顔に席をうゝさせ給ひ
ゝるなんと有し朕も雅心
深くも忠あるものあ梨と思い過し
ゆるう中孫に運拙くゆゝまして
深なあ深立もう者空しあるを
いあり男あるゝ孫回れのことく
なりい
父母の恩に立て立ばさせ

滋賀県

人と男のうち西郷如よし次郎
とゝなゝくゝありていさい西行
のことをもひゝもうるまくもうち
死をすゝてゝはカとあを負き
ものゝもなくくうくつまとも窮中経を
あはゝうてゝ市の静宿をゝ作む
よ架
父ものを母し立の空ゝうゝさうを
出て正ゝ舊忠を貴ゝうは指竜
有ようせて正切と九家の屋を役
ゝもゝ毎ゝものなり
うゝこゝ川ゝるあゝの骨ゝをや
も子ゝ云ゝうゝ重ゝうゝ行ゝい
ゝゝ九
正平二十三
二月十九日
御花押
笠川西國

滋賀県

豐臣秀吉公笠川家由緒書之寫

こゝふ此獻藥地ゝゝ久ゝゝ居住せる
笠川某といふもの有り出世初め
若靈天皇の裔なりとて志ゝ
より利のあいよく日吉の社神事に公役
をはたしあるゝ間乃ひとり屋敷其
外ゝい南北に両朝合戦のとき 楠
正成に付ゝ
後醍醐天皇の御味方申たし奉るに
うゝ申ゝゝゝ其軍功奉ゝかゝく

滋賀縣

かくしと雖ども南朝に運
すくして終に足利氏うたんて
よをとりあつまきうまの志うをしよう
後い南朝よりうとたのこ自はこし
人をもつつしう足利よりなひきて今い
正成もすくく正行なくく義貞志
すくなりよりてたまに一人に力よ
なりまする人もなうまーう
天下は権柄に足利よ属しつく
はなくまて足利のりをよ志をまる

志すくよ諸戦しるこうとはさきま
とも此笠川盛家且一子盛保ハて
うしいりよ者志名命よ庭をさりよる
と雖かーアりよ九郎ハえよ雪
笠川う麓下たきさともよ所敵對
をもやすを亀うまりよ勢ひなれ
高師師直等始うくも以きとを
鬼神とよをまーー正成正行たるも
字下こーうる所南家よ敵対なを
申条寺とくく塙郷う斧どすて

滋賀県

は事を向こうにまかせ、古今
たぐひなく、十くさの木葉武者の名を
師直の麾下に加はり、安藤十三郎成
巻八、一方は生捕りとなりしを
当氏公推賞あり、笠川
古今稀なる英雄夫吉野くだり
第一の付属は、三条殿もか
きりとうら百騎まとうまやまき
きーとあ、きやと、今ときと、岳をさー
むかし事不有ありたくうまきう心を

ときとうちに拝賀面ーとのさまひ
ゐ其大度をかくしたるものなり
日ーとまを勢第一なるものなり成
らまを去ときまとも一うきい豊兼いたて
後年のりーとむとなるまりる丈まれ
二代将軍三代将軍あ、ー
まをとうを弟くとも出仕せさりるとま
足利八代の将軍義政公改仁ー
ーて第民其徳澤はなはだ上下交も
仁君と稱ーるまをとも去ときまとを

なかへとも敵する出仕すべき義をな
こう事なりさるに伊達大膳大夫尚宗い
よ〳〵笠間と因こ方なりさる家なりる
こうこの事世つづくおもひ
よりり笠川を館より行てとゝまさ
とさされりるるあきを今い笠川も
いあ事へおよしまく尚宗に出きを
きて出仕をを我をしりるさきとも
日〳〵登城せるるも行すす日ぬう
一氏様言月のをとなを花河を

を我ゝ上うりる平度を義宗公
は元服のとゝまるも地身一ゝり只
佐〳〵木宣教笠川の家に潘ゐ一
りる事あゆ記録ようりりるる
上ゝ出ゝる織田信長足利とる
和とゝ〳〵せ移ひしまる市歓對ゝ
さ一ゝり信長公姫ゝくゝなとをり
角ゆひ亦亡一ゝんとひ一ゝゆる事
とも名歳の衆徒威勢強大ゝて
敵ゝるさ一あゝかゝ角りゝゝ延唐

ちも焼死をしるるるるてしまいや
かまをもうちこさんと作らきりるを
光秀前田利家徳川秀康あるをと
しるめりるるる夫橋家をさ〜元
と〜言る我郎よりきる氏あり又
ケ一端の陣つるをもてかまをあ
こしるるりまるるせきき所心と
世人の郎弁大うるあるも竹ろさ
笠ぬをあきてうちりるあ
るひ〜あ〜ト人もなるをも

問くきくもあるいるせるあと
云てよりをしるめりる拾なう
りきの後い笠ぬも武備の人きき
るてるくるるあるるくりるこる
りきを又しう法師いるを公事
をもしあ神るをあ〜しあ〜
りるこるこるあるるるる者なるりる
日のるまりきい伊達家の庶子う
さるりるるるる又るも笠川城すり
るくしてえのあくり日吉社弟事

事ありさまとて舊記を閲するに
いつとも吉凶えたの形を消滅して
なれいはうるはしくすくなくなり
まうるかるよ家所をうくるひいるあ
金銀をあーさをーてもとめんとて
市中より茶席をかまへ京風流人
或い哥人をいつかたらう月に年を
一ふ二品も使をもとめ申すあ
も古代よりの古記行方出来て今
ハ少事をもありてえのかく神るまを

ようあーさとて心をつくめりることとく
世ようきとうーしくてをうー形を学
毎年ハ吉凶をうりるこてる玄川
法印まーえ人ー神るまを行まあ
返ーとあ中ー云りきとも奉行とうく
るようーいあーさまる若ー行まを也
うくよ鑄鋳ールるかつまを行
ようる機をもて近てこの世をあさめ
しめりれまを行れ名をうりしく
とるくあとさい世りの考うまつ

もんうくとて云海さくまるる
ちうる日吉社再興ぶ川ちてる
其職爲叶の如くとかを立ちを
とて出孫四郎を使ふ扇の一枝
筆ものまるる其外まるる
職爲ひるるるふとをう
ちひりるるる事

慶長元

ヲ記　秀吉花押

滋賀県